

専攻科保育専攻の12年間の軌跡

～在学生・修了生の学修成果の検証と保育現場にもたらす有効性～

A Detailed Record 12 Years of the Post-Graduate Childcare Course and S.L.O

陣内 敦、吉田 美恵子、澤田 須賀子

I 研究の目的

本学専攻科保育専攻は、短期大学を卒業し、幼稚園教諭二種免許状を取得した者が、さらに専門的能力を修得し、幼稚園教諭一種免許状を取得するために、学士（教育学）の学位を取得させることを目的として、平成20年4月に開設され現在12年が経過した。途中、本紀要第26号（平成26年3月発刊）において、「専攻科 保育専攻 6年間の軌跡（1）—在学時・修了時・修了後における学習成果の検証結果—」と「専攻科 保育専攻 6年間の軌跡（2）—学修成果が保育現場にもたらす有効性—」を著し、6年間の専攻科の成果を報告している。その後、本専攻科はさらにディプロマポリシーの再構築をおこなうとともに教育課程の改革をおこなってきた。

本稿で著す研究の成果は、令和2年2月に開催した第4回同窓会の際におこなったアンケート調査からの分析と考察である。この中でおこなっている一つ目の検証は、新たなディプロマポリシーの到達目標の指標に照らし合わせ、2年課程内の学修成果と、さらに修了後にこの成果がどのように活かされ、または醸成しているのかを調査したものである。二つ目の検証は、保育実践アンケートとクロストークを通して在学生ならびに修了生の保育実践の現状を把握し、専攻科での学びを具体的に調査したものである。これら2点の検証結果によって、本学専攻科のキャリア形成における課題と将来的展望を見出していきたいと考えるものである。

II 研究の方法

- 1 在学生ならびに修了生の『ディプロマポリシーの人材養成の到達目標』に関するアンケート調査による検証
- 2 保育実践アンケートと同窓会開催におけるクロ

ストークによる在学生ならびに修了生の保育実践の現状と本学専攻科のキャリア形成の調査による検証

III 研究の結果と考察

前章に示した2点の研究方法によって、下記の催事において研究の具体をおこなった。

〈催事概要〉

専攻科保育専攻 第4回 専蝶会（同窓会）

主催：専蝶会会長（1期生）

専蝶会企画運営委委員（3期生）

顧問：本学教員3名

（陣内敦 吉田美恵子 澤田須賀子）

テーマ：「専攻科保育専攻の学修成果」

期日：令和2年2月22日（土）13:00～16:00

場所：長崎短期大学 第3合同講義室および体育館

内容：①運営委員長挨拶

②専攻科の現状について（専攻科長）

③修了生と在学生の自己紹介とクロストーク

④レクリエーション

⑤在学生の報告・謝辞

（アンケート記入）

- 1 在学生ならびに修了生の『ディプロマポリシーの人材養成の到達目標』に関するアンケート調査による分析と考察

上記同窓会開催時に、『ディプロマポリシーの人材養成の到達目標』に関するアンケート調査をおこなった。調査内容と分析および考察は以下のとおりである。

【調査内容】

問1 次に示す「学位授与の方針（ベンチマーク）」は、専攻科保育専攻が目指す資質能力の目標です。

あなたが、職場（保育職以外も含む インターンシップも含む）で自分自身に活かされていると感じる資質能力を1位～5位まで選択し、番号で答えてください。また、1位の資質能力のみ、それが活かされていると感じる場面を記述してください。例：I-②
2020年度 専攻科保育専攻学位授与の方針（ベンチマーク）

I 知識・専門技術・理解	①外国語コミュニケーション・情報機器の操作	外国語コミュニケーションと情報機器の操作のスキルを効果的に保育に活用すること
	②領域の専門的知識と技能	領域の専門的知識と技能を総括的に保育に活用すること
	③保育内容の指導法	保育内容の指導法のスキルを効果的に保育に活用すること
	④保育の基礎理論	保育の基礎理論を効果的に保育に活用すること
	⑤幼児理解・保育相談	幼児理解・保育相談の理論を効果的に保育に活用すること
	⑥子ども福祉	子ども福祉の理論を効果的に保育に活用すること
	⑦保育実践	保育理論を論理的方法によって実践すること
	⑧保育研究	保育の課題について研究した内容を、適切な方法で社会に伝達すること
	⑨一般教養	教養の中から自らの生き方を高める要素を見つけること
II 汎用的技能	①課題発見力	社会や地域の課題について考察すること
	②情報収集分析力	情報を論理的に組み立てること
	③問題解決力	科学的かつ倫理的方法で問題を解決すること

III 態度・志向性	①自己管理	社会の模範となるような生活と志向が確立していること
	②他者理解	他者を受容する豊かな心情と考えを持つこと
	③協働力	それぞれのチームのために建設的な意見を持ち、目的に貢献すること
	④使命感	地域の福祉と教育に貢献する努力を継続すること
IV 総合的な学習経験と創造的思考力	①学修の体系化	これまで学修した内容を総合し、創造的な思考をすること
	②保育実践力	保育理論を論理的方法によって実践すること
	③研究力	保育の課題について研究した内容を、適切な方法で社会に伝達すること

【分析および考察】

自分自身に活かされていると感じるものとして選択された1位～5位までの資質能力の換算方法として、1位（5P）、2位（4P）、3位（3P）、4位（2P）、5位（1P）のポイントを付け算出した。

n = 19[修了生8名(内保育職5名) 在学生11名]

（1）全体データの分析および考察

n = 19（のべ215ポイント）

〈全体1位の資質能力〉

42ポイント

III態度・志向性	②他者理解
他者を受容する豊かな心情と考えを持つこと	

〈全体2位の資質能力〉

28ポイント

I 知識・専門技術・理解	⑤幼児理解・保育相談
幼児理解・保育相談の理論を効果的に保育に活用すること	

〈全体3位の資質能力〉

15ポイント

III態度・志向性	①自己管理
社会の模範となるような生活と志向が確立していること	

15ポイント

Ⅲ態度・志向性	③協働力
それぞれのチームのために建設的な意見を持ち、目的に貢献すること	

〈全体4位の資質能力〉

14ポイント

I知識・専門技術・理解	③保育内容の指導法
保育内容の指導法のスキルを効果的に保育に活用すること	

14ポイント

I知識・専門技術・理解	⑨一般教養
教養の中から自らの生き方を高める要素を見つけること	

〈全体5位の資質能力〉

13ポイント

I知識・専門技術・理解	②領域の専門的知識と技能
領域の専門的知識と技能を総括的に保育に活用すること	

1位には「他者理解」が挙げられており、保育者間や幼児とのコミュニケーション力を重視していることが分かる。

2位には「幼児理解・保育相談」が挙げられており、保育職の業務の中心に幼児としっかり向き合い、保護者とも適切な対応が必要であると認識していることが分かる。

3位には「自己管理」と「協働力」が挙げられており、職場での役割とチーム力の大切さを意識していることが分かる。

4位には「保育内容の指導法」と「一般教養」が挙げられており、保育者が現場で子ども達を援助していく際に、様々なケースに柔軟に対応できる指導法・援助法を持つことの大切さを意識していること、またそれを支える豊かな教養との関係を認識していることが分かる。

5位には「領域の専門的知識と技能」が挙げられており、子どもを支援していく時の5領域の観点によって、自らの保育を構築していこうとする姿勢を窺うことができる。

(2) 修了生のデータの分析および考察

n = 8 のべ66ポイント

〈修了生1位の資質能力〉

22ポイント

Ⅲ態度・志向性	②他者理解
他者を受容する豊かな心情と考えを持つこと	

〈修了生2位の資質能力〉

10ポイント

I知識・専門技術・理解	⑤幼児理解・保育相談
幼児理解・保育相談の理論を効果的に保育に活用すること	

〈修了生3位の資質能力〉

8ポイント

Ⅲ態度・志向性	①自己管理
社会の模範となるような生活と志向が確立していること	

〈修了生4位の資質能力〉

5ポイント

Ⅳ総合的な学習経験と創造的思考力	①学修の体系化
これまで学修した内容を総合し、創造的な思考をすること	

〈修了生5位の資質能力〉

4ポイント

I知識・専門技術・理解	⑨一般教養
教養の中から自らの生き方を高める要素を見つけること	

1位の「他者理解」と2位の「幼児理解・保育相談」と3位の「自己管理」は、全体データと同様である。

4位には「学修の体系化」が挙げられており、保育の教育課程で学んだことを総合しながら、今後のことを志向する意識を持っていることが推測できる。

5位には「一般教養」が挙げられており、人と接する時の引き出しの多さや豊かな感性の必要性を感じていることが分かる。

修了生が重要視する資質能力として、保育職の総合性があるのではないかと考える。

(3) 在学生のデータの分析および考察

n = 11 (のべ149ポイント)

〈在学生1位の資質能力〉

20ポイント

Ⅲ態度・志向性	②他者理解
他者を受容する豊かな心情と考えを持つこと	

〈在学生2位の資質能力〉

18ポイント

I知識・専門技術・理解	⑤幼児理解・保育相談
幼児理解・保育相談の理論を効果的に保育に活用すること	

〈在学生3位の資質能力〉

14ポイント

I 知識・専門技術・理解	③保育内容の指導法
保育内容の指導法のスキルを効果的に保育に活用すること	

〈在学生4位の資質能力〉

13ポイント

I 知識・専門技術・理解	②領域の専門的知識と技能
領域の専門的知識と技能を総括的に保育に活用すること	

〈在学生5位の資質能力〉

12ポイント

II 汎用的技能	②情報収集分析力
情報を論理的に組み立てること	

1位の「他者理解」と2位の「幼児理解・保育相談」は、全体データと同様である。

3位には「保育内容の指導法」と、4位には「領域の専門的知識と技能」が挙げられていることについては、在学生がインターンシップの保育実践の中で、より具体的かつ実践的な技能を求めていることが分かる。

5位には「情報収集分析力」が挙げられており、これは保育研究をおこなうにあたり、情報を集め論理的に考えを組み立てることの難しさと大切さを切実に感じていることの表れではないかと考える。

在学生が重要視する資質能力として、学科の時に学びきれなかった学び直し課題として、保育の具体性と論理性をとらえているのではないかと考えることができる。

次に、活かされていると感じる場面の記述は、以下の内容であった。

I - ③保育内容の指導法
保育実践をおこなった時、みんなの意見を取り入れ、保育現場でも実践に活かすことができた。
授業で学んだことが実際に園でおきた時、役に立つことがあった。
I - ⑤幼児理解・保育相談
学科の授業だけでは相談にのる際に専門的なアドバイスができるか不安でしたが、授業で実践して練習することで少し自信がついたように感じます。
まずは子どもを理解することが大切だと感じる。
子どもの自己主張に寄り添うことができ、子どもと一緒に笑顔になれるとき。

I - ⑨一般教養

インターンや学校で関わる人や環境から、刺激を受け、自分を見つめ直すことができる。

III - ②情報収集分析力

子どもたちやその保護者の方と話をするとき。

子どもと関わる時は必ずその子どもの状態や特性等考え受容するようにしている。

自分が園で働いていく上で、他の人との協力は欠かせないが、上手く付き合っていくことが大事だと思う。その中で、他の人の考えを否定的に捉えるのではなく、理解しようとすることで上手く付き合う。それが、仕事でも協力し合えるいい関係になる。

III - ③協働力

現在は、保育の仕事に携わっていないが、仕事をしていく中で協力して働くこと、相手の意見を聞いたり、受け入れたりすることが出来ていると感じた。

III - ④使命感

保育者の学習会を開催し、保育現場の現状・課題を話し、情報の共有を行っている。母親と女性教職員の会の「子どもの教育環境を考える会」に参加し、保護者や教職員の話を聞きながら、保育者としての意見や考えを述べてきた。自治労主催の全国保育集会において、「保育の質の向上」講師にチャレンジした。

IV - ②保育実践力

保育現場で実践しながら、学校で学習することで、保育実践力が見についていると感じる。また、学習したことを保育で活かす場面があると学習してきて良かったと思う。

IV - ③研究力

研究では、保育や子どもを様々な角度から見つめる機会があり、保育に行き詰ったとき、どのような方法があるか考えることに通じると思う。また、研究論文を読むことや、自らが研究した内容も知識として身に付けられる。

(4)『ディプロマポリシーの人材養成の到達目標』アンケート調査における総合考察

修了生・在学生が共通して重要視している項目として1位と2位に「他者理解」「幼児理解・保育相談」が挙げられており、同じ教育課程を修めている人材として保育者観の整合があるのではないかと考えられる。人と人の関係を大切にしていこうとする意志をここから読み取ることができる。3位から5位までの項目は、修了生と在学生では重視している項目が異なっている。修了生は、「自己管理」「学修の体

系化」「一般教養」を挙げており、保育職の総合性さらには人間としての総合力を意識していくキャリア形成の過程をたどっているのではないかと推察することができる。一方、在学生は3位から5位までの項目に「保育内容の指導法」「領域の専門的知識と技能」「情報収集分析力」を挙げており、教育課程の途中に於いて子ども支援の具体と論理的思考を求める姿を見ることができる。

このように、同じ教育課程を修めるときの意志の共通性と、学修の過程の違いによる意識の相違が確認できた。この相違はすなわちキャリア形成の過程に表れる意識の段階であると言うことができる。

2 保育実践アンケートと同窓会開催におけるクロストークによる在学生ならびに修了生の保育実践の現状と本学専攻科のキャリア形成の分析と考察

上記同窓会開催時に、クロストークによる在学生ならびに修了生の保育実践の現状と本学専攻科のキャリア形成の調査をおこなった。調査内容と分析および考察は以下のとおりである。

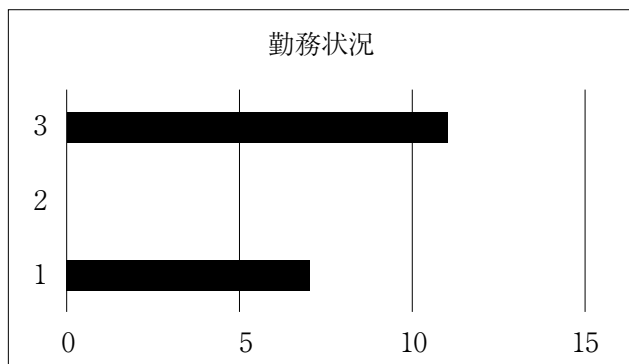
【保育実践アンケート調査の分析】

問2 以下の項目に該当する番号を○で囲んでください。

ア 勤務状況について（保育職でない方も含む）

- 1 現在は正規職員
- 2 非正規（臨時）職員
- 3 インターンシップ生（在学生）

n = 18（修了生7名 在学生11名）



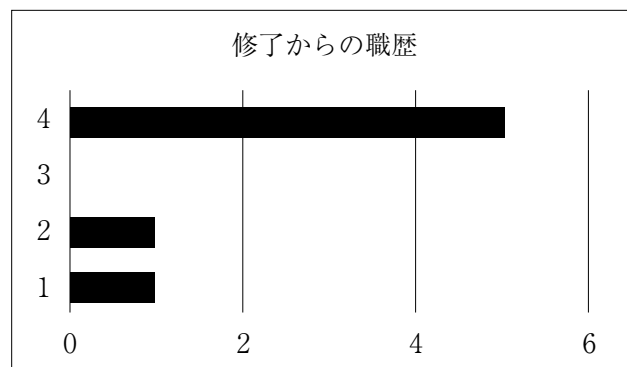
イ 専攻科修了からの職歴（修了生の方のみ）

- 1 修了後～現在まで同じ保育園
- 2 修了後～現在まで同じ幼稚園
- 3 修了後～現在まで保育職以外の職業

4 修了後～現在まで職場が変わった（職場名を記入してください）

□ → □ → □

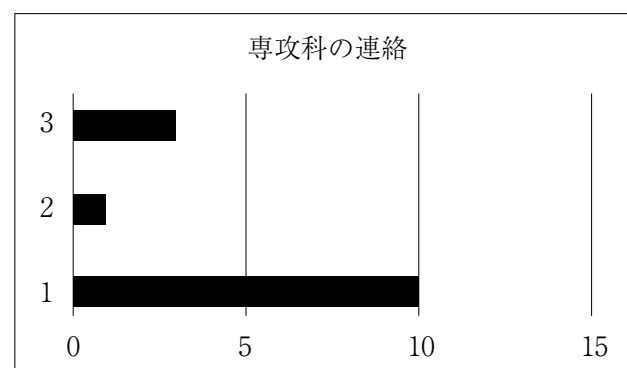
n = 7（修了生のみ）



ウ 専攻科の皆さんと連絡を取り合っていますか。（複数回答可）

- 1 同期で取り合っている
- 2 先輩や後輩と取り合っている
- 3 取り合っていない

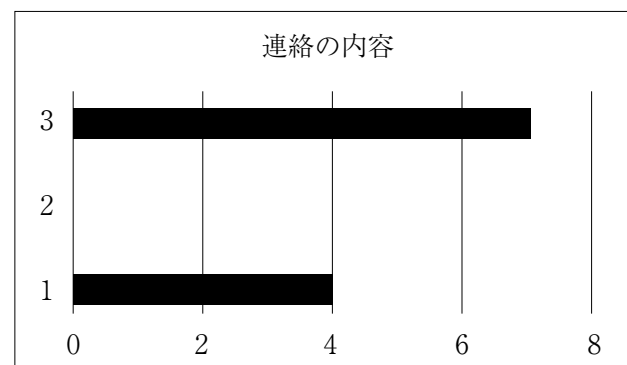
n = 14



エ 連絡の内容を教えてください。（ウで1、2と回答された方のみ）

- 1 （保育 or 仕事）の内容について
- 2 職場の人間関係について
- 3 その他プライベートの内容について

n = 11



問3 保育実践内容について以下の項目に該当する番号を○で囲んでください。(現在保育職の方のみ)

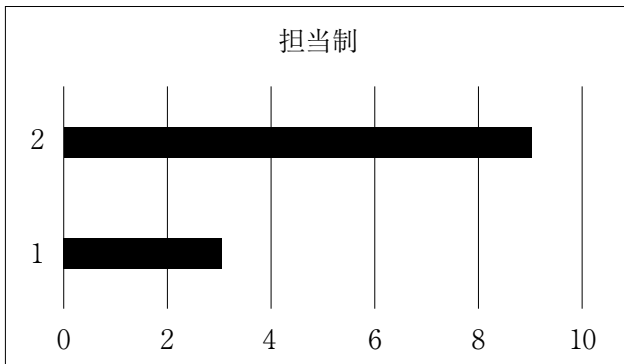
オ 現在の担当クラスは () 歳児クラス
n = 13

0～5歳児 (1名)
1歳児 (1名)
3歳児 (2名)
3,4歳児 (1名)
3,4,5歳児 (2名)
5歳児 (3名)
フリー (3名)

カ 担当制は

- 1 一人担任
- 2 複数で担当

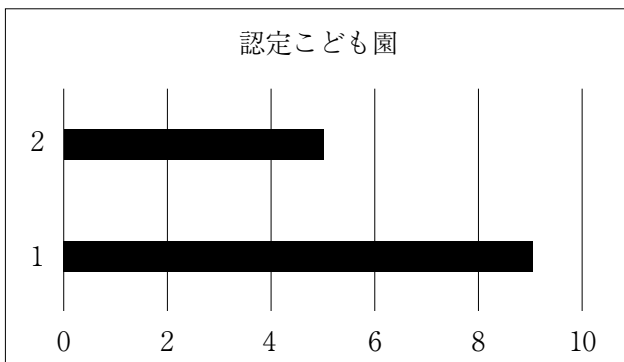
n = 12



キ 現在の園は認定こども園ですか。

- 1 はい
- 2 いいえ

n = 14

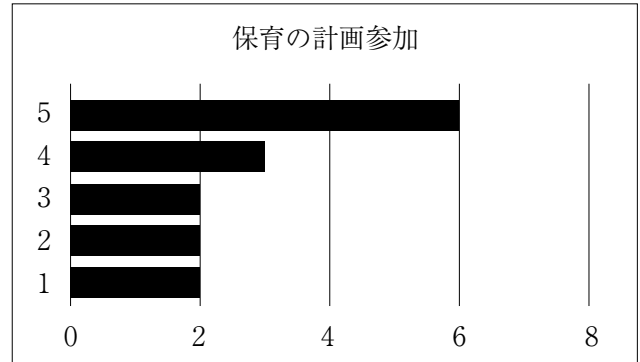


幼稚園型 3園
保育所型 2園
幼保連携型 2園
未記入 2園

ク 保育の計画作成に於いて、職員会や部会のお話し合いに参加していますか。(複数回答可)

- 1 保育課程や教育課程の作成に参加している
- 2 年間指導計画作成に参加している
- 3 月間指導計画作成に参加している
- 4 週案を話し合っている
- 5 その日の計画について話し合っている

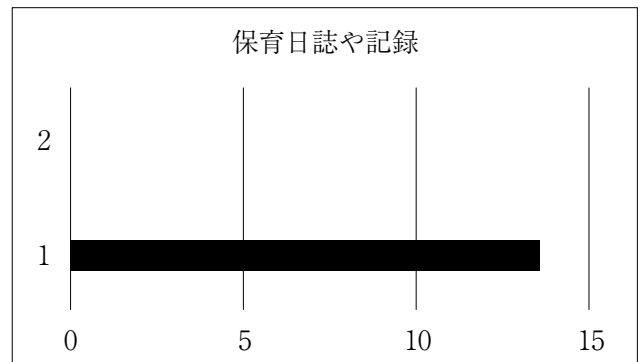
n = 7



ケ 毎日の保育日誌や記録はつけていますか。

- 1 つけている
- 2 つけていない

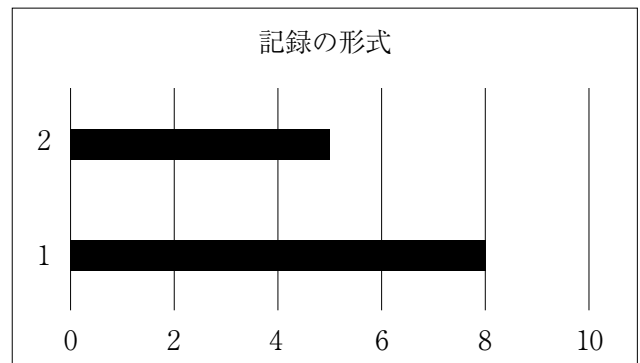
n = 13



コ 保育日誌や記録はどのような形式の記録ですか。(ケの1に○をした方)

- 1 週日案的な記録
- 2 個人記録

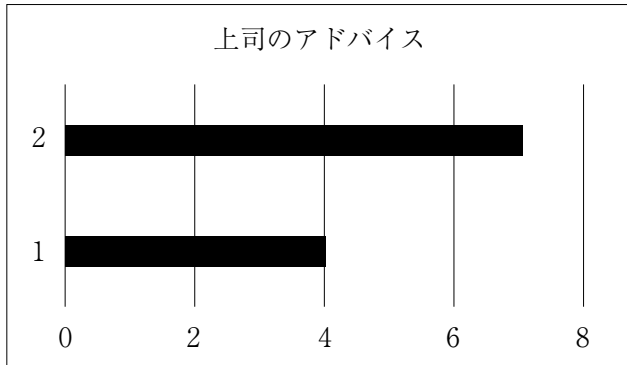
n = 13



㊴ 保育日誌や記録は上司の方への提出やアドバイスはありますか。

- 1 ある
- 2 ない

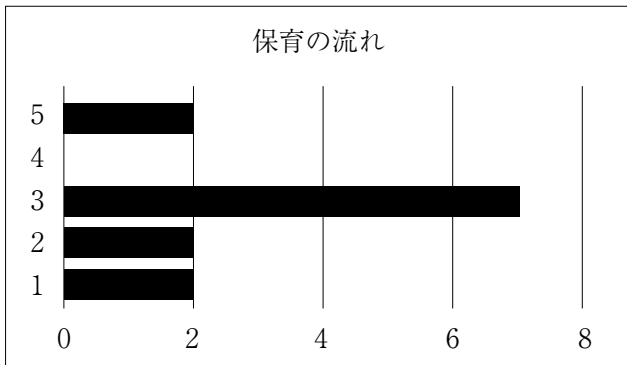
n = 11



㊵ 1日の保育の流れについて該当するものに○をつけてください。

- 1 登園→自由遊び→設定保育→昼食→午睡→自由遊び→設定保育→降園
- 2 登園→自由遊び→設定保育→昼食→自由遊び→設定保育→降園
- 3 登園→自由遊び→昼食→午睡→自由遊び→降園
- 4 登園→自由遊び→昼食→自由遊び→降園
- 5 その他 ()

n = 12



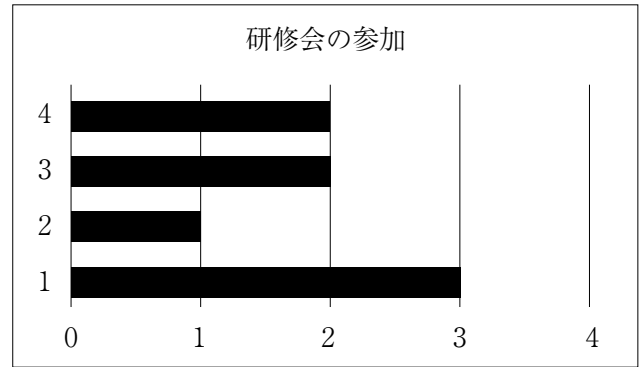
その他の回答

登園→自由遊び→設定保育→昼食→自由遊び→降園

㊶ 研修会で発表または参加したことはありますか？
(複数回答可) (在学生を除く)

- 1 園内研修で授業や発表をした
- 2 公的な場所で公開保育や発表をおこなった
- 3 研修会に参加し受講した
- 4 何もおこなっていない

n = 6

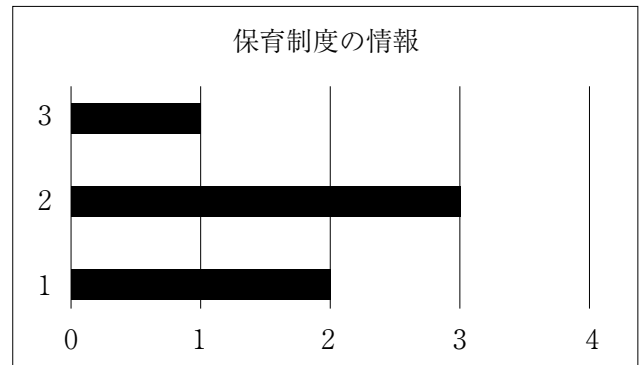


㊷ 子ども・子育て新システムや認定こども園法などについて情報は得られていますか？

(在学生を除く)

- 1 園内の会議などでも議題にあがっている
- 2 内容の経過が理解できるよう伝達がある
- 3 全く情報は得られない

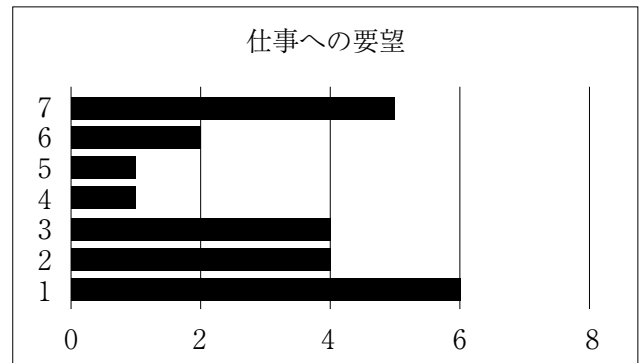
n = 6



㊸ 今あなたが仕事に関して、望んでいるのは何ですか？ (複数回答可)

- 1 給与改善
- 2 勤務時間の短縮
- 3 自宅での仕事削減
- 4 研修への参加
- 5 心身疲労からの解放
- 6 趣味の時間確保
- 7 休暇(日)の取りやすさ

n = 8



【保育実践アンケート調査からの考察】

アンケート結果から、修了生参加者は全員正規職員として勤務していることがわかった。保育職に対してのやりがいを見出し、結婚出産を経てからも保育の現場で働き、子ども達や保護者への支援をし続けていきたいという思いが読み取れる。一方で、結婚出産の場合は住居などの物理的問題も発生し、保育職は続けているものの、職場が変わるというケースも多くみられた。

専攻科の仲間と連絡を取り合っているかという質問では、専攻科修了後は前後の学年としばらくは連絡を取るものの、年数が経つと同期との連絡に留まっていることが分かった。内容としてはプライベートの相談が多いという結果が出た。就職して間もない頃は、保育についての悩みや職場の人間関係を相談することもあったようだが、経験年数が経つにつれ自己解決できるようになっていることがこの結果につながっていると考えられる。

就職に関しては、認定こども園へ就職している修了生が多かった。近年、保育施設全体において「認定こども園」への移行が進んでいるため、その流れがこの結果に出ていると考えられる。

予想外の結果が出た項目は、保育計画についてである。専攻科の授業内で保育課程・教育課程、年間指導計画等を作成した経験があるものの、園内ではその話し合いには参加せず、週案を保育者同士で話し合うに留まるという結果であった。この結果には、園内の保育計画を作成していくポジションの問題があると感じられた。しかし、専攻科の2年間、毎日欠かさず行ってきた保育記録については就職後も全員が継続していることが分かり、修了生の記録の積み重ねが保育実践の確かな基盤になっていることを確認することができた。

【同窓会クロストークの分析】

ここでおこなった同窓会の最も重要な内容が修了生と在学生のクロストークである。およそ1時間程度で「専攻科の学修成果」という広い協議テーマを意識しながら、修了生と在学生の2～3名7グループに配分し、クロストークをおこなった。ほとんどが初対面であることから最初に自己紹介をおこない、次第に現在と過去の専攻科の出来事などを交えた談話に変わり、さらに共通する保育についての取

り組み意識が共有され、協議が進められていった。以下、クロストークに参加メンバーが残した協議メモより、協議の概要を分析する。

第4回専蝶会（修了生と在学生の協議メモまとめ）

Aグループ（修了生1名、在学生2名）

モンテッソーリの保育について修了生に質問し、教具の使い方や京都での研修の内容などが紹介された。モンテッソーリ教育を取り入れている園へ就職する場合は、就職してからの学修で充分間に合うが、一人の母親になる場合においても意味があると語られた。

また、専攻科在学時の思い出と現状が相互に話題提供された。

Bグループ（修了生1名、在学生2名）

修了生は、在学生へ「どんな保育者になりたいか」という保育の夢を語るよう促した。子ども主体の保育の必要性が挙げられた。修了生は、自身の失敗談も踏まえながら、理想を持つことの大切さと周りの先生方との協力や連携があつてこそ成し遂げられるものであることが語られた。さらに保護者の気持ちに寄り添うことの意味についても話し合われた。保護者の考えや気持ちを知る方法、コミュニケーションの取り方なども在学生へ紹介された。

Cグループ（修了生1名、在学生2名）

修了生と在学生の研究論文のテーマが紹介された。このテーマが自分の保育に繋がることを念頭に置きながら、様々な園の特色について語られた。専攻科の時期は、インターンシップをしながら学んでいる時期であり、何でも質問できる環境でもある。これから就職するにあたって、園の様相を比較することや園の先生方の保育観を見ていくことも大切だとして、それぞれの経験した園の優れたところ難しいところなどが語られた。また、修了生の務めている都会地の園の環境や保育内容についても紹介された。

Dグループ（修了生1名、在学生2名）

在学生の一人が質問をし、保育経験の長いリカレント生と修了生がそれに答える形式で協議が進められた。子育てをしながらの保育について、乳児保育の大切さ、人との出会いの中から価値観を広げることの大切さ、保育現場での協働のあり方、幼稚園と保育の仕事と雰囲気の違い、外国籍の子どもと保育者への対応などが語られた。在学生は将来の不安を拭き方向性を見出すことができ、リカレント生と修了生は自身の保育を振り返る機会となった。また、リカレント教育の大切さと、これが普及していない現状についても語られた。

Eグループ（修了生1名、在学生2名）

在学生からインターンシップで保育園と幼稚園の両方を経験しておいた方がよいかという質問がなされ、修了生がこれについて様々な園の保育を経験することで自分がやりたい保育が見えてくるところがあると答えた。この中で、子どもに関する保育者間の情報共有の仕方、保護者への情報提供の仕方のあり様はその園の保育観の違いが表われるところでもあるとされた。また、修了生は現在子育てのために休職していることから、在学生から育児について質問がなされた。修了生は、休職中もアンテナを張って保育制度など世の中の流れを注視していくことの大切さを感じ敏感に把握に努めようとしていた。

Fグループ（修了生1名、在学生1名）

在学生が英語教育を研究論文のテーマにしていることと、修了生の勤務園が米軍関係の利用者が多いところから、外国籍の幼児とその保護者への対応に関して情報交換がなされた。母親との会話が英語のみの場合、伝達の仕方に苦労することが多く、重要な内容は専門職に頼って書簡にすることもあるなど、具体的な対応方法も紹介された。また、子どもの1日の様子などについて保育者間で情報共有することについても問題提起がなされ、様々な園の課題や現状など修了生の経験から紹介された。また、分からないことがあれば、そのままにしておくのではなく、聞いていくことの大切さが修了生よりアドバイスされた。

Gグループ（修了生1名、在学生2名）

修了生が現在子育てをおこなっていることから、子どもを園に預ける保護者側からの視点を中心に質問がなされた。修了生は保育者の負担軽減の必要性も感じるものの、それでも保育者の子どもとの向き合い方や伝達については不足を感じるころがあると語った。入園時における面談や1日の子どもの様子など保育者との会話を増やすことを求めたいなど、現在の保護者と保育者の関係の課題が紹介された。修了生も在学生の新鮮な感覚に触れ、初心の素晴らしさや大切さを感じていた。

【同窓会クロストークからの考察】

無作為に作った7グループのいずれにおいても、充実したクロストークが展開された。修了生は専攻科時代の学びやその後の保育実践経験談にも自信が見られ、在学生は修了生から知見を得たいという意欲が顕著であった。トーク内容を分析してみると、保護者との関係について協議されたグループはB・

E・F・Gである。実践現場でも保護者との関係に難しさを感じる保育者が多いことが見て取れた。専攻科生は毎日インターンシップをおこなっており、保育実践経験は得られるが、保護者との直接的な関係は殆ど得られない。この不安に対して修了生のトークや助言に関心が向けられた。協議内容では園の課題や現状を把握することの大切さや、保育者間の情報共有をおこなった上で保護者に寄り添う大切さに触れられている。この時に日々の保育記録がエビデンスになってくる。トークの中には言葉として出てこなかったが、前の保育実践アンケート調査において全員が保育記録をつけているという結果から、この記録を基にした発言がなされていたとみなすことができる。

保育環境や保育の形態についての協議があったのはA・C・D・Fグループであり、在学生は就職先の保育形態や研究論文のテーマとの関連について関心が強く、修了生からの細かい伝達が得られていた。1時間程度のクロストークでは、各グループの発表に対しての質疑応答の追及ができなかったことなど、さらなる内容の深まりを求めるところが残った。しかし、短期大学生にはない専攻科の保育の専門性を表す内容の協議になったと感じる。

IV まとめ～本学専攻科のキャリア形成に関する考察と将来的展望～

本著では、専攻科の同窓会の機会を用いて、専攻科の学修成果とキャリア形成について検証をおこなった。まず、同窓生が共通して重視している学修成果の項目として、「他者理解」「幼児理解・保育相談」があり、これを保育の中心に捉えていることが分かった。また、次に重視している項目として、在学生は保育学修のより実践的・具体的内容である「保育内容の指導法」「領域の専門的知識と技能」「情報収集分析力」、これに対して修了生は総合的内容である「自己管理」「学修の体系化」「一般教養」を挙げており、キャリア形成の過程をたどる上でのエビデンスデータとなった。

続いて保育実践のアンケートは、保育就業に関する追跡調査となったが、ここから確認できる学修成果としては、まず保育日誌作成の徹底の状況であった。また、保育計画に携わる機会がない現状については、共同して保育計画作成をおこなっていないと

いう現在の園運営の課題があると捉えた。

クロストークからは、最も多く協議に上ったテーマとして、「保護者との関係の作り方」と「保育環境と保育の形態」があった。これは、インターンシップの経験だけでは得られない継続した保育経験や様々な園での保育経験の集積によらなければ得られない知識であり、在学生から投げられた質問として出てきたものである。しかし、この質問もある一定量の学修と保育実践の集積によって作られた問題意識であるとも言える。

このように、専攻科1期生～12期生までの同窓生の繋がりによって、学修成果の検証や保育や子育てについて語る場ができあがったことは有意義に感じるところである。さらに、今後もこの場が保育者のキャリア形成の在り方を考える場として生かされていくことを期待したい。

***引用資料**

令和2年度長崎短期大学専攻科保育専攻ディプロマポリシー